カトリック八尾教会ニュース

“主は復活された、アレルヤ!アレルヤ！”

2025年4月

Tháng tư

【今月の予定】　　**ミサの時間**

６日(日)	四旬節第５主日	７：００	
		１０：００	
１３日(日)	受難の主日―――	７：００	➡ありません
	聖	１０：００	(枝の主日)
１７日(木)	聖木曜日　週	１９：３０	(主の晩餐)
１８日(金)	聖金曜日　間	１９：３０	(主の受難)　＜大斎，小斎＞
１９日(土)	聖土曜日―――	１９：００	(復活徹夜祭)
２０日(日)	復活の主日	７；００	➡ありません
		１０：００	初聖体式
	ベトナム語ミサ	１５：００	➡ありません
２７日(日)	復活節第２主日	７：００	(神のいつくしみの主日)
		１０：００	小 教 区評議会(ミサ後)

聖地のための献金

“主は復活された、アレルヤ！アレルヤ！”

■平日のミサ（木曜日）

➡今月はお休みです

■からし種　（テーマ）:『過越の聖なる三日間』

キリストは人間にあがないをもたらし、神に完全な栄光を帰するわざを、とりわけその過越の神秘によって成就され、ご自分の死をもってわたしたちの死を打ち砕き、復活をもってわたしたちにいのちをお与えになった。このため、主の受難と復活からなる「過越の聖なる三日間」は、全典礼暦年の頂点として輝きを放っている。　したがって、一週間の中で主日が占めている最高位を、復活の祭日は典礼暦年の中で占めている。

（第2バチカン公会議『典礼憲章』より）

2025年　四旬節「愛の献金」キャンペーン

四旬節「愛の献金」趣意書

今年、教会は聖年を祝います。この聖年は特に「希望」がテーマとして掲げられており、教皇フランシスコは聖年公布の大勅書で次のように述べました。

「希望はまさしく愛から生まれ、十字架上で刺し貫かれたイエスのみ心からわき出る愛がその根本です。」カリタスの活動現場に行くと、まさに、「希望は神の愛（カリタス）から生まれるのだ！」と感じる瞬間に度々出会います。・・・・略

※配布されている小冊子は献金報告、司教メッセージ、カレンダーとなっています。

■四旬節黙想会に参加して

３月９日(日)布施教会にてアン・ミンウ神父様ご指導のもと四旬節黙想会に参加しました。テーマは「イエスの歩まれた十字架の道」です。十字架の道行14留のみ言葉を読んで黙想のヒントをいただき十字架の道を辿りました。特に心に残ったのは第９留「イエス三度倒れる」です。力を使い果たしたイエスには神が共におられる意志だけが残っていましたが、三度目の倒れる場面で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれ、神さえも感じられない瞬間になったことを意味しています。何年もの間、神を感じられなくなったある神父様の経験を聞いて、神を感じられなくなることの恐怖を感じました。イエスは今一度起き上がり、十字架を担い希望のない暗黒の前進を続けられます。もし神様を感じられなくなった時はどのようにしたらよいのでしょうか？今までの信仰生活の習慣を信じて続けることが大切と教えてくださいました。イエス様の受難の道のりを黙想しながら四旬節を誠実に過ごすことができますように！　（信徒　K.M.）

■かわちブロック上田　憲神父様　異動のご挨拶

＊２０２０年４月にかわちブロックに着任され、コロナ禍、私たちと共に歩んで下さいました。２０２２年４月当教会の主任司祭を離れ、ブロックの司牧として関わって下さいました。３/３０付の異動で留学（カナダ）されることになりました。感謝とともにご活躍をお祈りいたします。

（『ともに歩む』月報３月より）　「遺言」　パトリック　上田　憲

いきなり縁起でもない言葉から始まる、今月の巻頭言。おそらくこの文書を読むころには皆さんは私の異動が耳に入っていることでしょう。そういうわけで、この「共に歩む」の巻頭言を私が書くのは最後になることでしょう。だからこそ、皆さんに伝えたいことがあります。そう、これは私の皆さんに遺す言葉です。　私にとって、この河内ブロックの教会はとても特別な教会でした。私の尊敬する神父様たちと働けたこと、私にとって初めての主任を任されたこと、私の大切な人達を見送った場所。その出会い、出来事一つ一つが大切でかけがえのない物です。だからこそ、皆さんに伝えたいことがあります。

①「互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ 15：12）

互いに愛し合うとはどういうことでしょうか。簡単です。「お互いを思いやりなさい」ということです。「思いやる」とは、どういうことでしょうか。簡単です。「相手の気持ちに立ち、自分を疑う」ということです。自分を信じすぎる人に、相手を思いやることはできません。なぜなら、それはいつしか「正義」に代わってしまうからです。自分の正義は、人を思いやることを忘れ、人を大切にすることを忘れます。

②「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」（ヨハネ 14:１）

これから先、多くの困難が待ち受けていることでしょう。大丈夫です。神はともにいます。神は何でもお出来になります。心配しないでください。私は皆さんを信じています。なぜなら、私が見てきた皆さんは、十分に神の民だからです。愛する皆さん、皆さんは私とともに歩んできました。

その私が言います。皆さんは本当に素晴らしい家族です。だからこそ、お互いに信頼することを忘れないでください。傷つくことを恐れないでください。傷ついたら、癒してもらいなさい。私もイエスのように祈りましょう。「サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」（ルカ 22:31 - 32）

③「いつもよろこんでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」（1 テサロニケ 5:16～18）

2025年は聖年、しかも「希望の巡礼者」として歩む恵みの時です。希望を持つ人は、いつも喜びを携えています。喜びを携える人は、周りの人に感謝を生きることができる人です。感謝は、祈りの基礎です。祈りの人は、神の道を歩む人です。神の道を歩む人は、希望の人です。このサイクルを忘れないでください。すべては、繋がっているのです。私とあなたが、私と教会が、そして私と神が繋がっているのです。巡礼とは、一方通行の動きではなく礼拝のうちに巡る旅なのです。

④「三度目にイエスは言われた。『ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。』」（ヨハネ 21:17）

最後に、道に迷いそうになった時、この問いを投げかけてください。必ず答えが出ます。神は愛だからです。大丈夫です。愛の選択は、常に私たちを成長させることでしょう。それは、からし種のような小さな種が、多くの鳥が休む木のように、東大阪の小さな教会が、信徒だけでなく、町の人をはじめ、人生の旅人の憩いの場として歩めるように、常に神の愛の体現者として歩んでください。改めて、皆さんに感謝の言葉をお伝えします。本当にありがとうございました。最初に書いた通り、この河内ブロックは私にとって特別な教会です。どれほどの感謝を伝えても伝えきることはできないでしょう。私の至らなさから、傷つけた方も多々おられると思います。この場を借りてお詫びいたします、申し訳ございませんでした。どうか教会をあきらめないでください。教会はいつでも私たちの帰る場所であり、御父は自ら食卓を整え、出迎えてくださいます。（ルカ 15:20）安心してください。皆さんが背負った十字架を、私はこれから共に担い、共に歩みます。人の２倍の体重はありますから。どうか、お体に気を付けて。また会える日を楽しみに。

Bon　voyage dans la vie , bonne foi.（良い人生、良い信仰の旅を！）

消え去るから残るんや

崔　周永神父

ここ最近、ラジオにハマっている。映像全盛期という段階を越えて、ありとあらゆる所で動画が見れる昨今ながら、音のみで勝負するラジオという媒体。　日本ラジオ放送百周年だそうだし、今更、己のような気難しい者まで引き付けるラジオの魅力を言うよりは、短い紙面が与えられた此の便りでは、音について考えてみたい。

人の心に訴えてくる音、それも、人間の音声とはいったい何か？音調の気持ちよさ、駆使される言葉の的確さ、実に絶妙なリズム感

などは基本要素の上、話者が託している言葉への信頼感も加わるからこそ、素晴らしい語りになる音声であろう。そういった音声は、歌手の楽曲の歌詞に載ったり、トーク番組のパーソナリティの味わい深い且つユーモアセンスに富んだ語り口は勿論、無駄なく淡々と述べる学者の発表会にだってあり得る。聴者達は、内容は言うまでもなく、実に甘美なリズムに乗ってくる、巧みに選ばれた、何も嫌な違和感を感じれない、その言葉の饗宴に徐々に耽っていき、だっぷり珍味を味わい尽くしていく。

やや抽象的だが、語り手も聴き手達もその間、新しい世界を経験する。無意識の海原に潜んでいた情報のマテリアル(materiale)が確たる現実味を浴びて現れ、そのメッセージへの共感を催す。存在しなかった考えによる閃きが扉を開いて走ってくるのだ。あ〜、そうだ。自分が望んでいたものは此れだったと頷いてしまう。聴く側も、語る方も混然一体になっていく。両者間の物理的な距離は決して問題にならない。

メッセージが真実なものであれば、それは必ず伝わるし、祈りも勿論だ。心の中で静かに、しかし、切実に捧げるお祈りは、神様の前に届いては実を結んで降りて来るまでは決して落ちない。何故なら、今を生きている我らだけではなく、生きていた過去の人々も、これから生まれてくる者らも、こういった真実さを切実という媒体に乗せ続けるからだ。人間は自分という個を通して、人類全体の悩みを感じる「はず」だ。

雨だった先週の主日の帰り、藤美東交差点ちょっと過ぎのタイ焼き屋の前に、傘をさしてしゃがみ込んでは大泣きしている三歳か四歳かの女児を、自転車のペダルを一所懸命回しながら見かけた。何かのねだりが叶えてもらえなかったのだろうか、その様子が可愛く可笑しくて微笑んだが、と同時に、心の奥を引き裂いては去っていく痛みを感じた。あ〜、あの子もいつかは死んでいくのだろう。今、自転車に乗って走っている自分も勿論だ。時間は流れ、人間は劣っていく。そして、死ぬ。

全生涯を通して、主（ぬし）の発してきた真実な音声は、しかし、ずっと残るだろう。人々の心と魂にくっきり刻まれていて、人生という旅路の支えになって、我らを励ますだろう、きっと！

ありがとうな。亡き兄よ、亡き父よ！